

我ら 50 期 ここにあり

鬼を考える②



鬼は一般には、人に危害を加え、ときには人を食べてしまう存在とも考えられており、悪いもの・恐ろしいものの代名詞として扱われることが多いです。しかし全国的にみると、村を守るなど善行を行なって民から慕われたり、崇められ、神として祀られている鬼も少なくありません。鬼が悪者であるというイメージは、昔ばなしやお伽噺の中で定着していったものなのです。

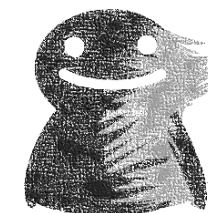
「鬼」は人を形容する言葉としてもよく使われます。残酷さであったり、無慈悲さ・非情さであったり、厳しさ・恐ろしさであったりと様々ですが、大抵の場合、自分の想像力を越えた心の持ち主に対して使います。私たちにとって理解できない人間は、時として鬼になるのです。相手を人ではなく、鬼として憎む。いつの時代も繰り返されてきたことではありますが、理解からは最もかけ離れた行為です。では、その理解できないはずの鬼を理解するようになるのでしょうか。



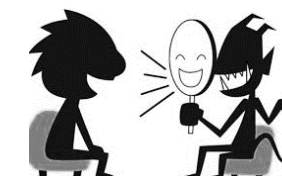
流されない「勇気」

「何事も自分の良心に照らして判断し、成すべきことを成す」「周囲がどうあろうとも、よくないことには同調しない」一人ひとりがそんな勇気を培うことは、社会全体がより良い方向に変わっていく力になるのではないのでしょうか。私たちは、いけないことだとわかっているのに、つい周囲に引きずられてしまう弱さを持っています。そんな流されやすい人間だからこそ、意識して自分自身の心の声に耳を傾けていく必要があるのではないのでしょうか。手がかりの一つは、思いやりの心です。「もし自分が相手の立場だったら」と考えてみると、自分を大切に思うのと同じように、他の人たちもまた大切にすべき存在であることに、あらためて思い至るのではないのでしょうか。その点を心に留めつつ、勇気を持って自分自身の行動を見直していきたいものです。

「不安」に惑わされないために



「不安」とは、恐ろしいものに脅かされているという感覚ですが、恐れる対象がはっきりした「恐怖」とは異なるとされ、「悪いことが起きそうで安心できない」というように、漠然としたものです。私たちは、何か問題に直面しても、あらかじめその問題に対する方策がわかっている場合には、さいて不安を感じずに済むでしょう。ところが有効な方策がなく、出口が見えない場合には、「どうしたらよいか」と悩み続けなければならないところに不安が膨らんでいくのではないのでしょうか。こうして「心のゆとり」が失われると、身の回りで起こる出来事のすべてに不安を感じ、ますます自分を追い込むことになるのです。私たち人間には弱い面があります。ひとたび心に不安が生まれると、見るもの、聞くもの、すべての不安をかき立てられます。そこから一人ひとりが「自分だけは」という思いで走ってしまうと、社会全体により大きな不安を生む原因ともなりかねません。不安に惑わされることなく、冷静に物事を判断し、周囲の人達や社会全体のことに思いをはせていくうえでも、「心のゆとり」は大切ではないのでしょうか。



高校の先生の本音を聴いた

実際に試験監督や面接を担当している高校の先生は、受験生をどのような目で見ているのだろうか。高校の先生方の生の声を聴いてみました。

ズバリ“好印象”を持つ受験生は？

▽挨拶がハキハキできる。▽姿勢が良い。▽志望理由がはっきりしていて、将来の進路希望もしっかり持っている。▽夢や中学時代に熱中できたものがある。▽高校生活で何をどのようにやりたいかをハッキリ述べるができる。▽入学したいという気持ちが強く伝わってくる。▽学習と共に、部活動、学級活動に対して積極的に参加していた。

反対に“マイナスイメージ”の受験生は？

▽「すべり止め」で受験しているという感じで、横柄な態度が出ている。▽ため口で話したり、不真面目な態度をとったりする。▽服装・頭髪などを試験当日だけ直して来たのかがわかる。▽声が小さく、ハッキリした答えが返ってこない。▽コミュニケーションや協調性に問題がありそう。